

再認定審査プロセスについて

川原 俊久

ます。

資格を失う
こととなり

日本ジオパークネットワーク (JGN) 再認定プロセスは各ジオパークがユネスコ世界ジオパークの活動理念に従った持続可能な活動をしているかを確認するため4年に一度行われる審査です。

日本ジオパーク公式認定機関の日本ジオパーク委員会が行います。この審査は各ジオパークの活動の確認、助言であり、不合格を目的とするものではないのですが、各ジオパークの活動が不活発、4年前の指摘事項の改善がみられない、ジオパークの理念からの逸脱の激しい動き、等々がみられた場合「条件付き再認定」という裁定がなされ、2年後に再度審査されることとなります。2年後の改善がみられない場合は、日本ジオパークネットワークの会員

今回の銚子ジオパークの再認定審査は、昨年11月に2名の調査員が現地調査に訪れジオパーク推進協議会事務局に前回指摘された問題点の改善状況、この4年間の活動状況を聞き、推進協議会会長の越川市長へのヒアリングを行い、翌日、各ジオパークの視察を行いました。この調査結果により本年2月の日本ジオパーク委員会での審査、裁定されました。

銚子ジオパークは他の7ジオパークとともに「再認定」され、南アルプス、白滝の2ジオパークは「条件付き再認定」となりました。

銚子ジオパークの森

保立 得造

一昨年に林野庁と銚子ジオパーク推進協議会が協定締結し、君ヶ浜の国有林エリアが銚子ジオパークの森となりました。この森のこれからの活用が大きな課題です。

この浜の渚に近いところは陽樹林の黒松が生息しています。およそ三百年前に飛砂防止のために植えられたものです。森の植相は年月の経過とともに陽樹林から陰樹林が変わっていきます。森の歴史から考えて極相林が実感できるチャンスです。審査員の方々を北エリアの森の中に案内しました。そこには様々な木本類、足元には四季折々に美しい花を咲かせる草本類が私達を迎えてくれました。森の入口付近にある黒松は、根に菌類が共生しており、お互いに栄養を交換し、肥料

再認定現地審査報告

が少ない痩せた土でも元気に生育します。森の奥に進むと陰樹林のタブの木が多く見られます。タブの木は水辺に沿って分布しますので、この近くもかつては水が流れていた事を伝えてくれます。ウルシ科のヌルデは、秋に塩分を含んだ黒い実をつけます。晩秋に真っ赤な実をつけるウラシマソウは、成長すると雌株から雌株に性転換します。マメ科のヌスビトハギは、秋口に種を付け、その形が盗人のメガネにそっくりです。このようにこの森の多様性を審査員の方々にご理解頂いたと思います。

今後、森の環境維持に努力して、犬吠埼や屏風ヶ浦に負けないジオサイトになるとを願っています。

余山貝塚から高田川チバニアンへ

内匠五月枝

貝塚南側指定史跡前で案内を開始。余山貝塚の概要と縄文海進以降の貝塚



周辺の土地の成り立ち、その後の変化等を数枚のフリップを使って説明する。

審査員の方が足元に散らばっている貝殻や土器の破片を手にとられ「本物のですか」と質問されたので、近隣の小学6年生が「ふるさと学習の場として活用子供達が夢中になって探し廻る様子を伝える」と「それは、面白い、良いですね」と感心されていた。

明治時代から有名な遺跡だったが、昭和60年以降は訪れる人も無く荒廃してしまつた。平成24年銚子がジオパークに認定されたと同時期に、「地域

の宝を後世の子供達に綺麗な環境で残そう」と地域住民が立ち上がり、「余山貝塚美化の会」が発足し、清掃活動が行われている。貝塚の西を流れる高田川添いの人達も「高田川と共生する会」、「白石ダムに集う大地の会」を発足。住民による清掃保護活動を紹介し、次のジオサイトへと向かう。

高田川チバニアン、露頭の前には地域の皆さんが大勢出迎えてくださり、岩本専門員の説明に熱心に耳を傾けていた。その様子をご覧になった審査員の方々は、「銚子は住民の結束がすごい、他では例がない」と感心されており、更に上流へと希望されたが、時間の制限があり次のジオサイトへと向かわれた。

市民の会田中会員のサポートと文化財班の赤塚主査の助言を頂き、ガイドは無事終了。忘れられないひと時であった。「感謝」。

